

令和7年度 特別の教育課程（書道科）の実施状況等について

春日井市立白山小学校

1 本校の教育目標

社会の変化に適切に対応できる「生きる力」の育成を目指し、個性尊重という基本的な考え方につけて、一人一人の能力・個性に応じた教育を展開する。

校 訓

- やりぬく子ー生活のきまりを身につけ、実践する子
- 考える子 ー正しい知識を求め、自ら学ぶ子
- 助け合う子ー善意と友愛に満ち、仲良くする子

2 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

小学校第1～6学年において新教科「書道科」を新設する。第1学年は、国語を30時間、生活科を4時間削減して新教科に充て、第2学年は、国語を30時間、生活科を5時間削減して新教科に充てる。第3～6学年は、国語を30時間、総合的な学習の時間を5時間削減して新教科に充てる。「書道科」において、書を書くという具体的な活動を通じ、友だちと触れ合ったり、家庭生活での話題をもたらしたり、地域の人々とのかかわりを生んだりする。そこから、集団の中での自分の役割や行動の仕方を考えさせるとともに、「書のまち」に生きるよさと愛着をもたせる。また、「書道」という伝統文化や「書のまち」を発信する地域の特性を探求する活動にも取り組むことを通して、表現力の向上と向上心の伸長を図るとともに、日本古来の文化や自分の生活する地域を振り返りながら自己の生き方をも考えさせる。

(2) 特例の適用期間

平成28年4月1日～令和11年3月31日

(3) 実施学年

1年、2年、3年、4年、5年、6年、（特別支援学級 単独でも実施）

(4) 地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

本市は、三蹟のひとり小野道風の生誕の地と言われており、全国的にも数少ない書専門の美術館小野道風記念館を有し、「書のまち春日井」として、書道の普及発展に力を入れている。特に、小野小学校では、愛知県下児童・生徒席上揮毫大会が昭和11年から戦争中も途切れることなく開催され、第1回からの優秀作品を保管するなど、愛知県の書道教育の中心的な役割を果たしてきている。

書道は、「文字を正しく整えて書く」ことにおいて、従前から行われてきた国語科における書写の目的に共通するが、その文化・芸術性及び精神性においては、書写とは一線を引くものである。現在、児童の「表現力の向上」「心の教育の充実」などが重要な教育課題であると認識している。

それらを解決するため、前述した地域性や学校の特色、さらには書道の特性を生かした「書道科」を新設し、表現力の向上を目指すとともに、よりよい作品をつくりあげようとする向上心、つくりあげた達成感から得られる自尊感情、相互評価などの他者との関わりから得られる親切心や規範意識等、特に心の充実を図りたいと考える。また、同時に郷土愛についても、書道を通して、「書のまち春日井」に根差して生活している自覚を促し、育っていく。

(5) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

2に記載する特別の教育課程について、教育基本法（平成18年法律第120号）及び学校教育法（昭和22年法律第26号）に規定する小学校等の教育の目標に関する規定等に照らして適切であることを、春日井市教育委員会において確認済み。

3 特別の教育課程の実施状況に関する評価

(1) 評価の観点

- ① 特別の教育課程の編成・実施により、学校の教育目標が十分に達成されているか
- ② 教育課程全体としてバランスの取れた教育活動が実施され、学校教育法に示す学校教育の目標が十分に達成されているか

(2) 自己評価

児童	<ul style="list-style-type: none">・ 自分の思いを表現するために筆の太さや墨の濃淡を工夫して書くことができた。・ 友だちの作品を見て、自分では思いつかない表現のよさに気づくことができた。・ 「書のまち春日井」について興味がわき、自分たちの住む地域に愛着をもつことができた。・ 納得がいくまで何度も書き直し、完成した時に達成感を感じることができた。・ 自分の好きな言葉を選んで書くのが楽しかった。最初は難しかったけれど、墨の表現で自分の気持ちを表すことができた。・ 筆で書かれた看板やチラシを見て「こんな書き方があるんだ」と驚いた。書道の世界は身近だと感じた。
教員	<ul style="list-style-type: none">・ 昨年度の課題であった「作品づくりのアイデア」について、職員間で実践事例を共有し、デジタルとかけ合わせた新しい作品や、掛け軸などの伝統的な作品など、多様な表現活動を展開することができた。・ 児童自身が表現したいテーマや文字を選択する授業構成にすることで、主体的に課題に取り組む姿が多く見られた。・ 書写（国語科）との違いを明確にし「整った文字」以上に「書く過程や思い」を評価するよう心がけた結果、書への苦手意識を持つ児童も意欲的に参加できるようになった。・ 書道科講師と連携し、専門的な指導を取り入れたことで、教員の指導力向上とともに児童の技能・意欲の向上が図られた。
保護者	<ul style="list-style-type: none">・ 学校ホームページや授業参観から、子どもたちがどのように書道に取り組んでいるかがよく分かった。・ 以前は服を汚すことばかり気にしていましたが、最近は「自分の思いを筆で書く時間が好き」と言うようになり、精神的な成長を感じた。・ 子どもの個性あふれる作品を見ることができ、こんな考え方や表現ができるんだと驚いた。今後もこのような表現の場を継続してほしい。

(3) 学校関係者評価

地域の方に春日井市での取組について紹介し「書のまち春日井としの雰囲気が感じられ、子どもたちが地域に誇りを持っている様子が伝わってきた」「書写とは異なる、自由でダイナミックな作品が多く見られた。特に高学年の作品には、心の葛藤や願いが込められており、心の教育としてもよい」などのご意見をいただいだ。

(4) 課題

書道というとアナログの印象があるが、これから時代に合わせ、デジタルとの関連も図りたい。タブレット端末を活用し、制作過程（筆の運びや墨の広がり）を動画で記録して振り返ったり、デジタル作品集として保存・発信したりするなど、書道とICTを融合させた新たな表現・鑑賞活動を考えていく。